

## 第三話

### 貞純親王化白竜給事

『前太平記』上 卷第一 二十一頁から二十四頁より

このような素晴らしい喜びばかりをお伝えしたが、人の生死は天命で決まってお

死生命有り、

り、死神もまたどうしたらいいかと迷うこともなく、（魂を奪う）。延喜十六年五

奪魂使亦奈何ともすること無し。

月七日、中務親王（貞純親王）、これという御異変もないのに、急に御寝殿でお亡くなりになった。宮中の慌てふためきようは度を越えており、典薬頭(巻)がお薬をお勧め申し上げたが、お口にまでも入れようとしな。色々な寺に人を走らせ、貴僧に命じてお祈りなどを至らぬところもなく行われたが、とうとうその効果もなく、その未明に薨去されたので、車馬は門前に入り交じり身分問わず道路で騒ぎ動揺する。ああ、残念に思おう。お年は四十三歳で、まだ盛んな時期であるのに、お亡くなりになることは世の中の慣わしとは言いながら、今始まった無常のように天下の悲しみは、幾重もの嘆きのように、自分自身のたった一人の子供を失ったかの

一天の愁ひ

九重の嘆き

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

ようだ。そのような状態でずっといるべきではないので、泣く泣く御遺体を梅檀の

泣く泣く尊骸を梅檀の煙りに揚げ、

煙で掻き立てて、丁寧な供養が慣例に従って執り行いなさった。

作善恭養形の如く執り行なはせ給ひける。

そのころ上は三公から下は庶民に至るまで、不思議なお告げが相次いだ。府生  
(式)の紀氏光の夢に場所は貞純親王がお住みになる桃園宮(参)の池と思われたが、  
七宝(肆)の宮城となり瑠璃の高殿、珊瑚の階、瑪瑙の敷石は温かくて真珠の砂はき  
めが細やかである。はるかに東を眺めると春の光はのどかで、海棠と桃・李が枝を

遙かに東を望めば、春光融々として、海棠・桃李梢を争ひ、

伸ばしあい、霞を分け飛ぶ鶯の囀る声も朗らかに、池の氷も少し解けて、岸の若草

霞分け来る鶯の、囀る声もうらゝかに、御池の凍打ち解けて、岸の若草

が芽吹き始めている。西に向かうと、秋の気配がはっきりとして、紅葉・蘭菊が色

萌へ出づる。西に向かへば、秋気爽々として、紅葉・蘭菊色を交へ、

を交え、霧の間を飛ぶ初雁の数がはっきりと、明るく照っている月（に照らさ

霧間に渡る初雁の、数明らかに照れる月、

れ）、その空気は厳しいほどに冷たく、骨身に針を刺してくる。南の夏の光が燃え

其気慄列として、人の肌骨に砒す。南は夏日炎々たるに、

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご  
記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

上がっているところで、垣根にある清水が清らかで、菖蒲・真菰が華麗な橘の花の

垣根の清水潔く、 菖蒲・菰蔞の清らなる、花橘の香を留めて、

香りを留めて、昔の痕跡が懐かしく思われる。北に出ると、冬枯れの木々の梢に積

昔の跡ぞ忍ばるゝ。 北に出づれば 冬枯れの、木々の梢に

もった雪も、春の花よりいっそう立派で、一日のうちずっと宮の中にいるが、その

積む雪も、 春の花より猶文に、 一日の内一宮の間にして、

気候は全く宮とは違う。その美しさと壮大な眺めは、これは中国の費長房が壺公の

気候更に斉しからず。 その奇麗壯観、 是や漢土の費長房、壺公が壺に徘徊し、

壺の中を回ったり、我が国の浦島が名越の仙室に行きついたりしたことも、これに

我朝の浦島が名越の仙室に到りしも、

は勝ると言えるだろうか。「ああ、素晴らしい。どんな人に住処だろうか」と不思議

此にやは勝るべき。

議に思うところに、雷が突然鳴り響いて、その身の丈十条ほどの神が、錦の帳を巻

雷霆忽ちに轆々として

き上げさせて、瑠璃の床机に座りなされると、異種異類の竜大小が、左右に二列に連

なる。少したって、空中から勇者が八人で輦輿を高く上げてきて、庭上に担ぎおい

た。どんな人であろうかと目を離さず見て座っていると、貞純親王が玉簾を巻き上

げてお出でになり、すぐに左右に挨拶をして、中央の床机にお座りになる。席も定まってから、神が言付けておっしゃることには、「昔釈尊が靈山にいらっしゃり、法華經を読むとき、私はその会中に連なり、仏に誓って言うことには『私は長い間末世にいて、仏法を護持しよう』。これだから、明朗に三千界を見ると、仏法の興隆の地は日本より優れた地はない。だから、今貴方が清和帝の子となることは、貴方の子孫が人臣に名を連ね、長く帝位を守護せさせそうな状態である。仏法を守りたいと思うならば、王法を守ることに及ぶまい。しかし、これは仏法が王法に相応するからである。今貴方は子がいて、孫がいて、皇居を守ることで十分であった。早く去って、この土に帰れ」。貞純親王は答えて言うことには、「私は仏法護持の前約があるといっても、今幼子を愛でるのに呆けて、まったくその約束を忘れてし

#### 今孩児の愛に溺れて

まったことに相応する。すぐに帰りたいと思う」。そうして神はにっこりとして、

#### 時に威神莞爾として、

「よいぞよいぞ。少しも躊躇うべきではない」とおっしゃると、すぐに例の朱楼  
(伍)・紫殿<sup>(陸)</sup>・玉欄干<sup>(漆)</sup>は徐々に消え失せていき、元の池となったところ、親王のお姿は、すぐさま一丈あまりある白龍となって、池の波を巻き返し、水底にお入りになると見て、すぐに夢は覚めてしまった。氏光は少しの間ぼうっとして、全く正気でもなかったが、だんだん気持ちを静め、汗を拭い、妻にこのような夢を見たと

話すと、妻が申しあげたことは、「夢はかねてからの望みの向かうところから生まれるとか申しあげますので、そうむやみに思し召しはかけられてはならないものがあります。しかしながら、いつも御懇意にし申しあげなさるお方であるので、急いで桃園宮に参上し、事情を尋ね聞いてください」と言うと、「実はこれはただ事ではない。ひっきりなしに胸がどきどきと脈打つので、仮にあれこれと考えて思うよりは、参上してみよう」と言って、太刀を取り出したが、大炊御門<sup>(捌)</sup>堀川で人が多く急いで行き違い、早くもやかましくなった。互いに知っている人に行き会ったので聞いてみると、「これこれのことで、親王がお亡くなりになった」と話したので、それでは正しい夢のお告げであると思い、いっそう足を早め、桃園宮へと参ったのだった。

---

## 注釈

※壱・典薬頭……宮内省に属し、医薬のことを司る役所の長官。

※弐・府生……六衛府の下級職員。

※参・桃園宮……不詳。

※肆・七宝……七種の宝物。無量寿経では金・銀・瑠璃・玻璃・瑪瑙・碑磔・珊瑚、法華経では金、銀、瑪瑙、瑠璃、碑磔、真珠、玫瑰。ここでは後者か。

※伍・朱楼……朱塗りの楼閣。

※陸・紫殿……紫宸殿のことか？内裏の殿舎の名。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

※漆・玉欄干……玉の垂れた手すり。

※捌・大炊御門……平安京にあった大路の名。

---

この話もまた美しい四季の描写が目立ちます。

しかし、今回さらに注目すべきは、話の中心が霊夢の記述にあることかと思います。『前太平記』は霊夢の描写が非常に多く存在し、それはとても幻想的に描かれています。今回は親王の死の予言でしたが、のちには家臣の集う予知夢の話もあり、大変興味深いです。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3  
海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※